

とある世界の魔獣図鑑

名無しの権左衛門

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ネタ。ちやっちやと書きながらわかりやすいように書く練習ですので、詳しい情景はあまり書きません。

1：真白学区「マサラタウン」——初動

破壊された家屋の天井。そこから無数の羽が舞い降りている。

彼はそんな景色を皆目無視して、後方の男女に背を向け前方にいる修道服の少女に向かつていった。

——その幻想をぶち壊す——

彼の救済の拳は、少女と後方にいる男女をまとめて救い上げた。

そして彼は助けられた事に安堵していると、脳天に何かを受け気絶してしまう。彼は何が起こったのかを把握できずそのまま、意識の闇に埋もれた。

「……知らない天井だ……」

彼は目を覚ます。痛む頭を抑えながら、そこから起き上がる。

起き上がるのと同時に、その世界を見渡す。

「俺の部屋？ つつ……。インデックスは……。あいつらはどこにいったんだ？」

彼の自室。学生寮でありながら、彼を襲った悲劇により悲惨なことになってしまったはずなのだ。しかし彼の目の前にあるのは、至つて普通の日常を謳歌していた頃の自室である。

幸いあのすっぱい焼きそばパンは存在しないことに、少しばかりの安心を彼にもたらす。

「つて、なんでカーテン閉めてんだよ。暑いじゃねえか」

彼はひとまずカーテンを開けて、そのちよつとした風に当たりながら思考にふける。

そんな暇はないと思つているが、本人たちがいない今こうやつて解決策を模索した方が変に動き回るよりいいだろう。

そんな風に思つていると、ふいにインターホンがなる。

「!？」

彼は突然の呼び鈴に驚き、すぐに玄関を開く。その先に彼が助けられた修道服の少女とあの男女が居ると信じて、期待を胸にその先へ進む。

しかしそれは簡単に打ち破られることになる。

「どうしたにやー上やん」

逆立った金髪、サングラスに眼鏡……。土御門元春が、玄関口にいた。

「あ、いや。なんでもねえよ。それよりどうしたんだ？」

「どうしたつて……。上やん何いつてんですたい」

「へ？」

その一言は、彼に衝撃を与えることになる。

「今日は旅立ちの日だぜ？」

「旅立ち？」

「あーまたうたたねで聞いてなかったんだな？まあーつたく、夢の中でも美少女を助けてやってたのかー」

彼——上条当麻は、とある高校の同級生である土御門に説明を求めた。しかしその説明はプリントでちゃんと渡されているという。

だがそんな時間も惜しいということで、土御門は彼に説明する。

「上やん、ちゃんと聞けよ？俺たちはこれから——」

これから今学期に入学した生徒は、この学区の学生寮に住むことになる。

更にそこから高校で一年間授業を受け、この世界を知りとある生物の扱い方を学ぶ。

一年間の授業の末、この学生寮に住む生徒たちは研究所でその生物を受け取り、道行く旅の中共に切磋琢磨する。一年後にとある学区に集合し、その生物の取り扱いを競い合うのだ。

「その生物の名前ってなんなんだ？」

「げ、上やん頭でもぶつけちまったのかにやー？」

この世界で扱うその生物は、新旧共にポケットモンスター——縮めてポケモンだ。

「ポケ……モン……?」

「そっですたい」

上条は青天の霹靂を受けた。彼の経験上ポケモンというものを知ったのは、学園都市に来る幼少の時だ。その時に出ていたのは、ポケモン赤緑である。

既知の存在が現実にいるということで、若干興奮してくる上条。

しかしまだインデックス達と出会えていない事に、少々焦りを感じてしまう。

「それで俺が上やんのところに来た理由、わかるかにやー?」

「は?一緒に行くためだろ?」

「いんや。俺はもう貰ったぜ?」

は?と呆ける彼に、土御門は右腕に光る腕輪を見せる。

この腕輪がポケモンボールの役割をするのだろう。腕輪にはボールという収納物代わりとして、宝石のようなものがついている。

「上やんがいまだにポケモンを受け取ってないってことで、ここに来たってことですか」

「えーとつまり……」

「遅刻だ」

「不幸だ!!!」

そう、すでにお天道様はほぼ天頂にきている。彼が起床した時暑さを感じたのは、すでに正午または真昼間にあたる時間帯だったからである。

「まーまー旅は規定の中継地点を渡っていけば、目的地まで行けるぜよ。」

一応プリントを探してみな。みつからなかったら、俺っちが連れてってやるさ」

「あ、ありがとな、土御門」

「いいってことよ」

上条当麻はプリントを探すと、旅に関してのプリントやポケモンに関しての教科書を見つけてくれた。

「あ、あったぜ。とにかく、インデックス達の事は後回しにして、この授業はやらねえと……」

この世界になる前の学園都市でも、彼は高校生であり高校に行っていた。

その高校の先生が、優しくも厳しい。約束を違えると、圧倒的補習の嵐で貴重な休日がつぶれてしまうことがある。いや、潰れる。

ポケモンの世界での補習はなんなのか。全く見当がつかないので、彼は焦ってしま

う。そう、約束を守らなければ、貴重な時間を失いインデックス達を探すための自由時間がなくなってしまうのだ。

「上やん、準備できたかにやー？」

「ああ！リュックサックに、その他もろもろできたぜ！」

「そんじゃ、行くぜよ——研究所に……！」

2：真白学区「マサラタウン」——起動

「ここが研究所か……」

「そうですね」

上条当麻と土御門元春が真白学区の学生寮を出て、そのまま道行く道を行けば目的地が見えてきた。どう見ても病院にしか見えないが、皆には研究所に見えるのだろう。

「ほら、上やん」

「お、おう。上条当麻です！ポケモンを受け取りに来ました！」

「やつと来たね、上条君」

研究所に来て、彼ら以外の声が聞こえた。その声は二階から聞こえ、声の主はそのまま階段から降りてくる。一階から三階まで吹き抜けで、見た目9階まである敷地が異常に広大な研究所。

「君が最後の生徒だね？」

声の主は、カエルのような顔をしている。

「オーキド博士。上やんに渡すポケモンはなんなんですかい」

「まあ待つてくれるかね？ 上条君に渡すものが、ちよつと特別仕様でね」

「なんだと？ 良いですなー不幸な上条当麻君」

「よ、よくわからんが、不幸だ……」

「まあそんなに落ち込むものでもないね？」

そういつて吹き抜けフロアから、奥の研究エリアに入る。

そこにはいろんな研究機材があり、目を引くのは培養液やらカプセルのようなもの。

博士は二人を連れて、研究所エリアの中央に立つ。

「上条君には、この腕輪を渡そう」

ポケモンに関して、捕獲・管理・解放・送信等数多の機能が付属している最新の装置だ。

これで過去色んな媒体でなしてきたことが、一つの機械でできるようになった。

「す、スゲエ……！」

上条は子供のころに戻ったかのように、興味が目の前のものだけに注ぎ込まれる。

一時的にインデックス達の事は忘れている。

「次にポケモン凶鑑を渡すんだがね？ 残念ながら、在庫を一つ間違えてしまつてね？」

臨時に完全自立思考体に、その役割をしてもらう事になつたんだね？」

そういつて博士はリモコンを取り出し、スイッチを押す。

すると奥にあるカプセルが微動しだして、結果開封される。

中腹くらいから扉が発生し、そこから何かでてくる。

出てきた瞬間いろんな合金アームが、それに対して装飾を行っている。

上条はその装飾が見たことのある服だったのを、見逃しはしなかった。

それは念願の願いか。はたまた、何故ここに？と疑念を抱かせたものだ。

しかし喧嘩をしてきた上条当麻は、いろいろお世話になったことがある医者と同じ顔をした博士が、そんな悪いことをするわけがないと頭を振るい考えを捨てる。

「さて、彼女がポケモン図鑑だよ」

「おいおい、上やんだけずるぜよ！こんなかわいい子ちゃん——いや、上やんだ。きつと図鑑相手でも、フラグを乱立させやばいのに巻き込まれるだろう」

「まあ、問題がないものはないよね？」

というわけで、よろしく頼むよ？

——Pokemon's Library：魔獣図鑑『インデックス』——

「嘘……だろ……？」

「上やん？」

驚愕する。破壊され安全ピンでとめられているハズの『歩く教会』が、完全に修復されている。魔術と科学が関わればまずいことになるのを、身をもって知っている上条当麻は色々考えた結果『不幸』であると結論付けた。

「マスター登録をします。ポケモントレーナー、上条当麻。

貴方が私のマスターです、トウマ」

その台詞に言葉が詰まる上条。

首輪を解除した時の無機質な声や抑揚のない声ではない。それでも、以前の明るく優しい彼女の様相が全て失われていることに、少なからず衝撃を受けてしまう。

しかし表情はある程度あるので、徐々に慣れていけばいいかとおもう上条さんであった。

「うむ。次に君の相棒だけど、あの子にしてみらうよ」

博士が指を向けた先にいるのは、黄色の体——ではない。

「か、上やん！ピカチュウだぜ!? この世に二万體しかいないと言われている、幻のポケモンだ！最高に幸運じゃねえか!」

「え、は? いや、ピカチュウか? ピカチュウは黄色……」

「どう見てもピカチュウだ! 『不幸』だなんて言わせねえからな!」

土御門が上条の肩を掴んで興奮している最中、目の前の存在に狼狽える上条。

「ピカ?」

「え、えーとよろしくな……ピカチュウ」

「ピッ」

「へ?」

上条はそのまま立った状態で、てを差し出す。

しかしピカチュウはそっぽを向く。そう、腕を組んで。

「あの。やっぱ、ピカチュウじゃねえよな?」

「ピカチュウだね?」「ピカチュウですたい」

「ふ、不幸だ……ってか、なんでビリビリがピカチュウやってんの!?

なんのどつきりですか!?!俺が何をしたっていうんですか!?!確かに上条さんは、学生寮とか色々ぶつ壊すような被害拡大しかしてないし、いろいろやばいことをやらかしてる
自覚はある!

でもこれは冗談がすぎるだろ!ピカチュウは黄色いからだに茶色の三本の線、赤い
ほっぺにギザギザしっぱ!?!なんなんですか!?!上条さんに対するあてつけか!?!一体全体、
お前らは俺にどんな恨みとか抱いてるんだあああ!!!」

「上やん、落ち着けよ」

「いっここでどなられても困るね？」

そういつてピカチュウこと、御坂美琴を連れていくことになった。
もちろんインデックスもそのままついてくる。

土御門とは一度別れた。さあ、はちやめちやな冒険が、君を待っている！

3：真白学区「マサラタウン」——行動

ピカチュウは、宝石「ボール」に入れられるのが嫌いだ。

だから外に出ている。また宝石に入れられそうになると、電気を放ってしまう。

「うぐぐ……」

「ピカッ」

ふいっとそっぽを向かれる。

上条は博士からもらった特殊な電気タイプ用のロープを使って、無理やりにも引きずっていく。

「あのさあ、ビリビリ。お前、俺の事がほんとに嫌いなんだな」

「ピカ」

頷く。それに項垂れる上条。

嫌いなのは察していたようだ。

「でも、俺はお前の事、好きだぜ？」

「ピカ？ピカ……ピカ……ピカ……」

するとピカチュウは、その言葉が意外なように見えた。

だが隣にいるインデックスから、なつき度は非常に低いことを告げられる。

「なつき度は旅をしていき、その最中の試練により上がっていきます。ハプニングこそ、もつとも超えられるものでしょう」

「ハプ……：簡単にお願ひします」

「バトルです。野生のポケモンに、勝負を仕掛けて勝利することで経験値を貰えます。また野生ではなくトレーナーのポケモンであれば、更に良い経験となります」

「ここらへんのシステムは、ゲームと同じ仕様な事に安心する彼。おかげで旧来からの記憶や知識が、無駄にならないことが分かった。

そしてこの時、ちょうど目の前にポケモンがいた。

「あ、あいつか！よしっ。ビリビリ、あのポケモンに攻撃だ！『電気ショック』！」

「ピッ」

「えーと、御坂美琴さん？いう事聞いてくれませんかね？」

目の前のポケモンへの攻撃指示に従わない様子を見て、上条は自分で戦って捕まえる意思を示す。

「あれはビリリダマです。非常に素早く……」

「よし！仲間ゲットだ！」

インデックスの忠告を聞くまでもなく、ビリリダマに向けて腕輪を向ける。腕輪についている寶石から、赤い光線が伸びる。

その光線が当たると。しかし、ビリリダマは何の反応もせず、その場できよろきよろしている。

「げっ、なんだこれ」

「ボールじゃないので、捕まえられる状態であれば寶石に収納されます。

できなければ何も起きません」

「そのために弱らせろって事だろ？なら、簡単だ！」

上条はビリビリの無関心ぶりに苛立っているのか、少々大きめの石を拾い上げて全力で投擲する。

ゴスツ

「あ」

盛大な打撲音が聞こえる。上条は音よりも、狙いから大きく外れてしまったことに意識が向いてしまう。

そしてそいつは叢から身をのぞかせる。

「へ、あ、あの、インデックスさん？あれもポケモンでせうか？」

「はい。オニスズメです」

「いやいやいや、どうみても……!」

オニスズメは怒っているようで、ぶつけた本人でなくピカチュウに向かって体当たりをする。

「ピカツ!」

とつきの攻撃に体をのけぞらせて回避する。

ピカチュウは身に覚えのない攻撃に苛立ち、電気ショックをお見舞いする。

オニスズメは電撃を受けて、遠くにある大木へ飛んでいった。

大木の枝に隠れると、すぐに大量のオニスズメを率いて上条達へ襲い掛かろうと向かってきた。

「はあ!」

「攻撃力判定不能。退避を進言します」

「逃げるぞビリビリ、インデックス!」

しかし逃さないというように、オニスズメの一匹が『機関銃』をちらつかせて迫ってくる。

「くっそ! あれはなんだ!?! どう見ても、ヘリコプターじゃねえか!」

「いいえ、オニスズメです」

「どうなってんだ、この世界!」

必死に逃げていると、逃げ道がこれ以上ない場所に來てしまう。そう崖だ。

眼下には流れのはやい川が流れている。逃げるには、ここに身を投げるしかない。だが考えてみれば、死を感じさせる光景だ。

「どうすれば……」

「迂回ルートはありません。飛び込むべきです」

「ちくしょうっ、いくぞビリビリっ」

「ピ……カ……」

弱弱しいピカチュウの声。何があったのか振り返ってみると、そこには遠方から機関銃で射撃され怪我を負っているピカチュウがいた。

上条はすぐに攻撃されているピカチュウの手を引いて抱き上げ、インデックスと共に眼下の川へ飛び降りる。

どぼんと飛び込み、流れに沿って川下へ。

水中で抵抗しないままインデックスの手を握って、場所を見極める。

ただ上条は先ほどすれ違った、長躯の龍のような何かがいる近辺は無理だと判断した。

(「……」だ)

上条達は河原に這い上がり、こきゆうを整える。
だがそんな暇はない。

「オニスズメの大群をレーダーで感知。来ます」

「くそつ、早すぎだろ！」

上条はピカチュウをすぐに抱きなおし、インデックスと逃げる。

天候が徐々に悪化し、早急の回避が必要な時それはおこる。インデックスによる検索で、一番近くにあるポケモンセンターに向かつて走っていると、インデックスがこけた。

いや、倒れた。

遠くには黒く動く塊が見える。

どさつという音に、先行している上条が振り返る。

「インデックス！」

「すみません、トウマ。足のモジュールが、極度の環境により摩耗。動きません」

「くそつ、お前も連れて行くから、ちよつと待つてろ」

「いえ。私は機械です。替えはいくらでもあります。命が一つしかない、マスタートウマとピカチュウが逃げ「ごちやごちや、煩せえつ！」……」

「機械が何だ、凶鑑がなんだ、替えが効くだそんなの関係ねえ！インデックスはインデックスだろ！この世界でたった一人の女の子だろうが！消耗品みたいに言うんじゃねえ

！まだ物語の序章にすぎねえところで、くたばっちゃうんじゃないやねえよ！俺が連れてつてやる……。

こんなところで、意味不明な奴らに俺たちの物語を壊されてたまるかっ!!」

上条は二人を脇に抱え逃げる。機械というわりには、本当に軽いインデックスの体に一瞬驚いた。しかしそんな猶予はない。

天候は悪化。雨が降り出し、土砂降りの様相を見せる。

暗雲は雷雨を生み出し、ここら一带を雷撃で埋め尽くす。

ちかよる悪魔のプロペラ音。

チユンツ

「っ!？」

機関銃である『タネマシンガン』は、運悪く上条の左足を打ち抜く。

あまりの激痛に苦悶の表情を浮かべながら、地面に倒れこむ。

更に『不運』にも段差があり、三人の体が強く打ち付けられる。

だが上条の受け身もあつて、ピカチュウとインデックスの負傷は比較的軽微だ。

「クソがつ、やってやる。俺が全部終わらせてやる！こうなったのも、俺が変な欲を張つちまつたからだ。落とし前はつけてやる」

体中泥だらけ。痛む左足を圧倒的精神力で耐え、右足に力を入れて立ち上がる。

そして二人に攻撃が行かないように、手を広げオニズメと対峙する。

「オニズメ！石をぶつけちゃまったのは、俺だ！何も関係ないところで、攻撃しちゃったのはすまなかつた！何も悪気があつたわけじゃない！だが許される訳じゃねえ！俺がすべての元凶だ！ピカチユウたちは関係ない！文句あるなら俺に向かつてこい、オニズメ！」

『機関銃』で攻撃しようにも、火花だけが飛び散る。

結果オニズメは、その大群をもつてして上条に襲い掛かる。

まるでクライマックスかのように、落雷が降り注ぐ。

上条は来る衝撃に、歯を食いしばって耐シヨック防御をする。

しかしその思惑は外れ、脇からピカチユウが前に飛び出る。

そしてできないはずの跳躍をやつてのけ、その体に落雷が落ちる——！

「ピイイイカアアアアチユウウウウウ!!!」

世界が雷撃と共に光で満たされる。

これには当事者全てが巻き込まれてしまうほど大規模で、結果的にこの雷雨も回復することになる。

上条はこの雷撃を目を腕で覆い防御したうえで、にげようとするオニズメに地面に

ある泥をぶつけ地面に落としたうえで宝石で捕まえる。

捕獲の感傷に浸ることはできず、そのまま後ろに崩れ落ちるピカチュウを支え自身も気絶し倒れる。

彼らが目を覚ますのは、太陽が西日になるころだ。

「ぐっ……ピカチュウ……」

「ピカ……」

地面にお互い向き合って寝そべっていた。

二人は二人を認識し、無事を確認する。怪我や火傷など色々負ったが、大丈夫なようだ。

「っ！そうだ、インデックス！」

「叫ばないでよ、とーま。ちゃんと、聞こえてるよ」

上条はその声質に、びっくりする。しゃべり方等、色々——違っていた。

むしろそれは聞いたことがある。あの子のしゃべり方だ。

「インデックス!?!記憶が戻ったのか!?!」

上条はこの世界がおかしいのか、自分がおかしいのかと一応思索していた。

だが皆が皆この世界に適應していること、雷撃をまともに受けてしまったこと等。確実に前とは違う場所だと思っていた。

そんな中機械的なしやべり方が、聞こえのあるなじみ深いしやべり方に戻れば？

上条は寝返ってインデックスを探した。彼女は寝返った目の前にいる。

「申し訳ありません。シヨックにより、記憶媒体が暴走しました。修復中です」

「いやいや、修復しなくていいから！むしろ、そつちな感じでお願います！」

「……修復中——失敗。もう！とーまのせいで、失敗ばつかしちやつてるじゃないの！

しかもこの失敗は、後ろの短髪の雷撃のせいなんだからね！——言語システムに致命的エラー、再起動します——失敗。この問題は、正常なものとして一時的放置を措置として行います」

直ったのかわからないが、インデックスが半分戻ってきたことに手を合わせた上条は嬉しくなった。

三人はお互いの無事を確認して立ち上がる。

「よし。まずはポケモンセンターに行こうぜ！」

「ピカッ！」

「うん！」

三人が歩き出そうとしたとき、空から聞いたことのない鳴き声が聞こえる。

三人は見上げ、ソレを見る。紅の疾駆。翼は虹色。だが鳥というには、いささか異形だ。

その異形から、きれいな羽が落ちる。

その羽は上条の手元に落ちてくる。

「なんだこれ」

「ピカア」

「きれいですね」

虹色の羽を、上条は手に入れた。

その異形は巨大な虹をくぐってどこかへ行ってしまった。

三人は突然の事、光景に心打たれ少しの時間棒立ち。

「……この幻想「こつちの世界」はクソツたれかと思ったけど、なんだ現実「あつちの世界」よりきれいじゃねえか」

上条はそう呟いて、二人と共にポケモンセンターへ向かった。

4：常盤學区「トキワシティ」——発動

上条達はポケモンセンターにて、怪我や色々な部位を治していた。ピカチュウは腕輪の宝石「ボール」に入れず、そのまま預けた。

そのあとは、抽選で豪華な食事券をもらって困惑していた信濃「しんのう」という少年と共に、大量の晩御飯を食らいつくした。主にインデックスのおかげで、なんとかなった。

「なあ、信濃。受付横のあれ、なんなんだ？」

「アレ？あー、アレ。アレはだね、昨今出没しているポケモン宝石泥棒ニダ」

「泥棒だと？」

「そうアルよ。宝石が一元化されちゃったから、捕まえることが難しくなっちゃったニダ」

「まじか。ということは、まだ逃げているってことだよな？」

「そうアルよ」

「犯人の特徴を保存。データに一時記録完了」

インデックスは万が一のため、犯人の特徴を保存し今後に備えた。

翌日。

元気になったピカチュウ、通信で予備のパーツを持ってきてもらったオーキド博士の助手に直してもらったインデックス、学校から支給されている旅行制服7番を貰って着替えた上条。

皆ほぼ回復して、出発できるようになった。

「インデックス、次はどこなんだ？」

「常盤学区です。通称、トキワシテイと呼ばれています。また、学園都市有数の有名校、常盤台中学校があることで有名です」

「あー、ビリビリの母校ね」

「ピカ？」

首をかしげるピカチュウ。

上条はその反応で、覚えていない事を確認する。

「なあ、インデックス。図鑑機能で、ピカチュウとオニズメのステータスとか分からねえか？」

「解析します————できました」

「すげえ!!」

というわけで、歩きながらステータスを確認した。

ピカチュウ：レア度4

オニスズメ：レア度2

「レア度つてなんだ？」

「熟練度」「自分だけの現実（パーソナルリアリティ）」を溜めて、一定の条件を満たすと次のレア度に行きます。近年あるゲームでいうと、上限突破「リミットオーバー」ですね。

ただこれらは資質も関係ありますので、初期レア度が高いほど成長率や成長限界、すべてに於いて高いです。しかしこのような個体は珍しく、なかなかお目にかかれませんか。

実をいうとあの雷雨の中の放電ですが、アレを受けたことでピカチュウのレア度が1上昇しました」

「ということとは、もともとレア度3だったんだな。すげえな、ビリビリ」

次に確認するのは技だ。技は基準とするものがあって、そこから派生が発生するので攻撃感知はできるが予知は不可能に近いとくぎを刺される。

「たしかあれも、電気ショックだよな？自然界の雷つて、相当だよな」

「むしろあれを、自身の力にできるのが不思議でたまりません」

凶鑑も真つ青なピカチュウの素質。

そんなこんなで、トキワシティに到着した。

「すぐにポケモンセンターで、登録しましょう」

「登録？」

「ポケモントレーナーたるもの、事務戦をするのは当然です」

「事務……まさか、ポケモンリーグに行けるのか!？」

「はい。ですが、期間は一年です。それとトウマの資料によると、出発から半年までにはタマムシシティに来るよう通達があります」

「半年!？」

マサラタウンからトキワシティまで、一週間足らずの距離だ。意外と世界は狭いのかもしれない。

「それじゃ、行く。とうまー!」

「お、おう!」

インデックスは上条とピカチュウの腕を握って、ポケモンセンターへ向かった。

ポケモンセンターは人でごった返していた。

さすがにこのポケモンセンターは、以前に泊まったポケモンセンターとは違って巨大だ。

最新器具やらハイテク化が推進されているようで、一種の空港に見えた。

「なんだこれ、すげえ」

上条が驚いていると、突然後ろから声がかかる。

「そこにいるのは上やんかにやー？」

「この声は……土御門！」

「やつぱりにやー、ここに来ると思ってたぜい！」

お互いに顔を合わせて、健闘を称えあっているとそこに割り込む人物がいる。

「あれ？そのイケメンは誰なのかな？かな？」

「おぉー、あいつはたしか、フラグメイカーな上条さんではないですか！」

「すまん、土御門。昨日雷に打たれたから、だれか分からねえんだ」

「上やん……。よく生きてたな」

「俺もびつくりだつて」

とにかく紹介を始めた。

「私は上山よ。よろしくかな？」

「俺様は新城だぜえーい」

二人ともクラスメートであり、上条と同じ遅刻組である。

そのため、これから外国に行かされるらしい。

「はあ!?!外国!?!」

「そうだよ。いやー、困っちゃうかな?でも、中々体験できないから、逆に嬉しいかな!」
「俺様も同意見だぜえーい!こんな未体験こそ、若人な時にやらねばならんといけねえーんだ!」

赤緑しか知らない上条が愕然とする。

確かにCMでは金銀等が発売されていた。しかし経済的余裕のない上条にとって、それはつゆ知らずな事だった。

「ポケモンバトルやってみたかったが、そろそろチャーター便がくるからまた会ったとき頼むぜえーい!」

「お、応!またな!」

「行っちゃまったにやー」

「嵐のような奴らだったな。ところで土御門。ポケモンバトルやらないか?」

「いーいぜよっ!」

というわけで、ポケモンリーグ挑戦権を得てから、ポケモンセンターに常設されているバトル広場へ向かった。

そこではすでに何組か戦闘していて、残り一つ空いていた。

「私が審判をしますので、両者お立合いを」

「よっしゃー！」

「いくぜよ」

両者トレーナーの立ち合い場に立ち、ポケモンを出す。

「まずは先手必勝だ、ピカチュウ！」

「行けっ！ビリリダマ！」

戦闘が始まった。

「ピカチュウ、電気ショック！」

「ビリリダマ、ソニックブーム！」

ビリリダマには効果はいま一つのようなだ。

ピカチュウは固定ダメージを受けた。

「は!?なんで、ピカチュウがこんなボロボロに」

「チュウ……」

「ソニックブーム。その方法は先ほどみただろ？あれのおかげで、俺たちは常勝無敗ですたい」

「ピカチュウ、しつぽをふる！」

ピカチュウにしつぽはないが、突っ込んではいけない。

だがビリリダマの防御を一段階下げた。

「ビリリダマ、直接ソニックブームだ！」

「ビリリ！」

ビリリダマは一円硬貨を10枚取り出し、圧縮させたものをピカチュウに投げつける。

ピカチュウは回避できず、一円玉の物理ダメージに加えそれが爆発。

爆炎と爆風「ソニックブーム」により、ピカチュウは戦闘不能になる。

「ピカチュウ！」

「ピカチュウ戦闘不能！勝者、マサラタウンの土御門！」

「ふう、上やん。初めてのトレーナーバトルはどうだ？」

ピカチュウの下へ向かい、介抱する上条。

普通のポケモンなら普通に悔しがる場面だが、どうみても普通の人間なポケモン。

現実「元の世界」と同じあの戦闘が、簡略化され血を見なくなっただけで全く同じことであることに上条は腹を立てた。

しかしこの世界のルールなので、むなしさだけが募る。

「ああ。どんなにレア度が高くても、ポケモンを理解しなきゃ手も足も出ないことがわかったよ」

「そうですね。あの爆風も、ビリリダマの特徴を利用したものだ。

つまり、ビリリダマの得意技です。だから、流れるように攻撃をした。

そしてそのピカチュウ。しつぽをふる攻撃だったが、動作が微妙で次の行動へ移るのが非常に遅かった。初めてにしては……というより、そのレア度を看板に張り付けただけの戦闘だった。

次はピカチュウをよく理解してやったほうがいい。しつぽを振るだけでも、抵抗するポケモンもいたりするからな」

「ああ、ありがとうな、土御門」

そういつてお互い、剣呑な雰囲気をやめにして、和解の握手をする。

しかし、そう言っていられるのも束の間で、すぐに厄介ごと「事件」が舞い込んだ。

突然インデックスの背後から、ボロボロになったポケモンが出現する。

そのポケモンは体中に火傷を負っていて、今にも倒れそうだった。

「お願いです、どうか……どうか、仲間を救ってください……」

「テレパシーだと……？」

普通のポケモンはしゃべることができない。

故にこの高等であり高位であるかもしれないポケモンが、何を求めて都会まで赴いたのか。

それはまだわからない。

5：常盤學区「トキワシティ」——連動

上条はラルトスを傷薬で傷を治している最中、インデックスに解析をしてもらおう。

「解析完了。ラルトスです。テレパシーにより、人間と意思疎通できます」

「普通のポケモン凶鑑より高性能ですたい。それよりも、俺たちに何の用だ？」

「はい。実は私の友達のパカチュウたちが大変なんです！」

「どう大変なんだ？」

上条以外の一般人が聞く。

「それは……き、来ました！」

そういうと、そこには黄色くない群れが木々の隙間から飛び上がる。

群れ全てが電気を身にまとい、攻撃態勢に入っていることがわかる。

「ビリリダマ、マグネットボム！」

「ビリー！」

土御門のビリリダマが一円玉を放り投げ、それを圧縮させて爆破させる。この爆発によりラルトスの友達達が、地面に向かって頭から落下。あまりの事に上条は耐シヨック防御をしたただけだった。

「こいつらは……ピカチュウ!? しかも、こんなにたくさん……」

「上やん。こいつらは、常盤の森のピカチュウたちですたい。特徴はあのゴーグルのようなものをつけているんだ」

「ゴーグル等装飾品、電撃レベルにより常盤の森のピカチュウに該当します」

冷静な分析に「すげえ」と感心する上条は、バトルフィールド以外で聞こえてくる電撃音と悲鳴に気をとられる。目視できるレベルで電撃が周囲を襲い、人やポケモンを傷つけている。

この現状に上条はいたたまれなくなり、遂には走り出してしまふ。

「ピカツ!?!」

突発的行動にワンテンポ遅れるピカチュウたち。

「ラルトス! ピカチュウたちが住んでいる常盤の森はどっちだ!」

〈こつちです!〉

上条は考える。常盤の森のピカチュウというのなら、そこにもともと住んでいるということ。ならばその常盤の森に原因があるんじゃないか、と思案に至った。それが嘘か真かの是非は関係ない。今この瞬間に、同型同種のピカチュウがこのトキワシテイを襲っている。この平地から見える常盤の森の一部からでも、電撃が溢れているのが見て取れる。それにそこから外部に向かって、異常に強い電撃が放たれている時点で、犯人

が常盤の森にいるまたはあることを指し示している。

「上やん！でたらめに行っても駄目ですたい！」

「駄目でも行動しねえと、関係ない人が今この瞬間に命さえ奪われているかもしれないねえんだ！今日の前に落ちていているヒントを拾って手繰りよせねえと、一生この事件の真相は闇の中になっちまう！」

「だが、常盤の森に何かあるなんて、確信があるのか?！」

「それはわからん!!けど、とにかく行動だ！ラルトス、常盤の森の頂上まで連れてつてくれ！」

〈はいー〉

全力疾走しだした二人は、ラルトスに先行して貰ってついていく。また先行しているとピカチュウが邪魔してくるので、それをビリリダマとピカチュウで追い払った。

息が切れるほどの全力疾走でたどり着く常盤の森。そこから奥へ走っていく。

しかしその快進撃は止まってしまふ。それは目の前にピカチュウではないポケモンが、姿を現せたからだ。その姿はだいたい色で長いしっぽを持ち、ピカチュウよりも暗い色でそろえられているポケモン……ではない。ピカチュウと同じような姿をしているが、ゴーグルをつけていない。ビリビリと同じように見えるが、立ち振る舞いや表情が全く違う。

違うところを探してみる。相違しているのは、瞳くらいか。真つ赤な瞳をしており、何やら様子がおかしい。

「すまない！ここを通してくれ！」

「駄目だよ。相当のお怒りの様子ですたい」

「ツ……！ライツチュウウウウウウウウウウ！！」

歯を食いしばり相当な逆鱗の様相を見せるポケモンは、全身から膨大な電力を放ち周囲へ拡散する。さらにそこから指向性を変更し、上条達の方へ向かってくる。

「まずいっ！ビリリダメっ」

しかし間に合わない。

「ピカッ！」

二人と一匹の目の前に、ピカチュウがでしゃばって両腕を開き仁王立ち。長時間電撃が直撃するが、どこにも怪我がないようで至って元気だ。

「ピカッ！ピカピッチュウツピカアツ！！」

「えーと、なんて？」

へおいアンタ、トウマに手を出すんじゃないわよ、との事です

さらに目の前のピカチュウ似の何かは、別の鳴き声で警戒色を強める。そんな時、インデックスが上条の隣に立つ。

「あれはピカチュウの進化系。ライチュウです。総合能力は相手の方が上ですが、素早さならばややピカチュウの方が有利です」

そんな説明が入るが、目の前のライチュウは全くひかない。そんなときピカチュウが、後ろを見て聲を上げる。その内容は、ここは任せて先に行きなさいとの事だ。しかしピカチュウの事を放っていけないという上条は、インデックスから謎の電界が周囲に展開されていると聞いてこの場合はピカチュウに任せる選択をした。

「っーライツ！」

「ピカッ！」

ライチュウが抜けていく上条達の方へ向かおうとすると、ピカチュウの電撃がライチュウの行動を阻止する。ライチュウが行動を阻害されているうちに、常盤の森がある山の頂上へ向かった。

常盤の森というのは、常盤學区にある森林地帯の総称である。そのためこの常盤の森には、比較的広大な森林地帯に山、湿原などが存在している。その中でインデックスが電界感じ取り、ラルトスがその発生源へ道案内する場所はこの広大な森林地帯のさらに奥。

そこは原生林が一部残っている山々の頂上だった。

途中山中にいるピカチュウたちが、上条達に襲い掛かってくる。それを彼らは強行突

破する。電撃を受ける前に、土御門のビリリダマがソニックブームで吹き飛ばしてくれ
た。おかげで比較的余力を保ちながら、最奥部に來ることができた。

最奥部にあるのは古めかしい外見でありながら、その作りは比較的新しい人工物だっ
た。

その人工物はただの建物でなく、低く広い建造物だ。

上条達は建造物の周囲を散策して、入口を探し当てる。土御門が「上やん」と上条達
を呼び寄せ、建造物の入り口が地面にあることを告げる。

上条は土御門とビリリダマと共に、地下へつながらる入口の鉄板をどける。そこには地
下へ続く階段があった。若干土と錆で汚れてしまつたが、こんなことは些細なことであ
る。

「……くぐり」

「ああ」

彼らは地下へ行き、薄く証明で照らされる構内を歩いていく。

そのまま緊張感をもって周囲を警戒しながら向かつた先にあるのは大きな広間。こ
こで確実に敵と邂逅するだろうという予測をもつて、警戒を厳にして歩みを進める。し
かしその足音はプロではないので、確実に消すことは叶わないのである。

「散開してください、マスタートウマー！」

「っ！」

インデックスが聲を発したその直後、念動力が飛んできた。それは目視できるほど強力なもので、空気がゆがむことにより確認できる。上条は直感的な察知により、敵の攻撃がインデックスと分かったためインデックスを射線上から押し出す。

その代わりに上条が攻撃を受けてしまう。

「上やん！くそっ、誰だ！」

土御門は吼える。後方を見据えた先にいるのは……。

〈お姉さま……〉

「何ッ!？」

ラルトスが愕然とし絶望する中で、土御門は驚愕と共に歯噛みする。

これは非常にまずいと思わせるには、十分な存在だった。

〈嗚呼、この先に反応があるのに……〉

6：常盤學区

ラルトスと土御門が眼前の存在に狼狽える中インデックスは、念動力の爆発で吹き飛ばされた中から起き上がる。

「き、キルリア……。ラルトスの進化系です。……トウマ、マスタートウマ、しっかりしてください……」

「つうつ……。大丈夫だ、インデックス。こんなのにやられるほど、やわじやねえ」

インデックスは解析結果を、念動爆発の衝撃で聲もとぎれとぎれに土御門達に伝え、主たる上条の下へ寄り添い介抱する。だがインデックスが思った以上に、上条当麻は頑丈だった。

「俺はいい、インデックス。怪我してねえな？」

「うん、とうまが守ってくれたから……」

「っし、なら、大丈夫だ」

「ラルトス。キルリアは強いのか」

「ぶっちぎりです」

「だったら話は早い。数に勝る今、早急に撃破する」

後方だけが人が無事を確認しているとき、土御門はラルトスと眼前脅威を押し量っている。この推測は当事者に聞くことで、信ぴょう性が確実になるが今は敵。立ちふさがのならば、排除しなければならぬ。

「おい、土御門！インデックスは無事だ、逃げるぞ！」

ここらの区画はつながっており、キルリア方面にも上条側にも通路がある。この大広間は4か所に通路がある。そこで今のが牽制であるならば、キルリアが立つ奥こそが最深部であることが確実だ。

たぶん。

いや、そうだろう。

そこで土御門元春は考える。最も効率的な解決方法を。いや、考える意味すらない。そんな事なぞ今までの経験上、常套手段として使ってきた。場面が違えど、それは結局同じ事に他ならない。

「……さて、背に腹はかえられないにやー」

彼は今後の選択を強いられることに、簡単なため息を一つつく。

「上やん。そつちにいつても、あるのはカス部屋だけだぜい」

「なんでわかるんだよ」

「キルリアは俺たちを倒そうと思えば、さっきのサイコカッターで弾幕を張ればいけたはずだにやー。でもそれをしないのは、俺たちがまだ『脅威ではない存在』または『ただの牽制でこの道を通らせない』ことでしたい。それかただの『時間稼ぎ』か」

土御門は真つ赤なボディを持つポケモン凶鑑を片手に、キルリアの能力を再確認しながら言う。

「そして俺たちが遭遇して5分が経過。テレパシーを使えるならば、ここの管理者に報告しているはずでしたい。でもそれがないのは、『誰もいない』か『いるけれど、行かなくていい』という絶対根拠が必要ですか」

「……おい、まさか……」

「そう、その通りだ。上やん。そしてここでやるのは、『死ぬかもしれない根拠のない未来』と『死しかない現状の打破』という天秤も必要ねえ、クソツたれな選択だぜい」

土御門は手首にある寶石に指をあて、何かを選択している。そして寶石から出てくる土御門のポケモン。そのポケモンは浮遊しており、実に突撃しかなさそうな体制をしている。

「土御門、お前、何を考えてんだ！」

「お前が行け、上やん。幸い、俺の方がポケモンに関しては、強い」

サングラスを指で直す土御門。余裕そうなその姿は、頼もしそうに見えるがまだ 〃駆

け出しの青年”であり、ただ“ちよっぴり強いだけ”のポケモントレーナーである

「ダンバル。はがね、エスパータイプ。エスパーに対して、1/4ダメージで済みます」
「ラルトス。上やんを頼むぜ」

「もちろんです。行きましよう！」

ラルトスが走り出すのと共に、土御門はビリリダマのソニックブームでキルリアを怯ませ、ダンバルの突進で攻撃を御した。しかしキルリアは隙間を縫って、走っているキルリア・上条とインデックスに向かって『マジカルリーフ』を飛ばした。

必中する不思議な葉っぱは、彼らに攻撃をぶつけたが戦闘不能にできなかった。ラルトスとインデックスは上条に抱き上げられ、彼の鍛えられた脚力で一気に戦線を離脱したのだ。

「さてと……キルリア、少し黙っててもらおうぜ？」

盛大な爆発音。上条は歯を食いしばり、後ろを気にしないで前を向いた。まだ死んではいないが、死なないとは限らない究極の選択。ラルトスに道案内してもらい、最奥部へ急ぐ。

なぜなら地上でも、珍しいながら強いピカチュウに対して、欲望を抱く者が出現した

とラルトスを感じ取ったからだ。その感情をキャッチする能力は、他のポケモンより追従を許さないほど特化している。おかげでポケモンと人間による惨劇を知れたのと同じに、この事件をすぐに解決しなければならぬという『気』を上条に抱かせるに至る。

「まじで、早くしろよ？ 上やん……」

土御門の眼前には、念動力を操りそれにより武器を練り上げているキルリアが阿修羅の如き覇気を身にまとい、殲滅必至の態勢を取っていた。

7：常盤學区——微動

閃光。

爆風。

本来なら少年少女の健全なスポーツとして、更に自然界で普通にありふれた光景として、ポケモンバトルは日常に溶け込んでいた。基本的に自然界では、縄張り争いや雌をめぐって雄が雄姿を見せつけるために行うもの。

そう、ポケモンバトルは、本来の意味で言えば遊戯に等しいものだった。なぜならそれでやられても、ひん死という半殺し状態で終わるのだから。

だが目の前で行われているのはなんだろうか？競争か、マルチバトルか。それはわからない。

しかしわかることがある。それは異常であること……。

そして、彼らはピカチュウを確実に、どんな手段を使ってもとらえようとしている者であることだ。

「いやあ、楽ちん楽ちん」

「これで、幹部の道も夢じゃないわね！」

「このまま一気に、捕獲するってのは当然なわけよ！」

「よし、ニヤース。このまま前進だー！」

「ラジャー！結局こちら、ロケット団に逆らうのは無意味なのよ！」

特徴的な服であり、胸には赤い“R”がプリントされている。ほかのロケット団下っ端と違って、彼らは遊撃隊なのかロボットを繰り出していた。さらにそのロボットに装着されている、『トリモチ』を使ってネズミ捕りをやっていく。

へえー諸君、ご苦労！このピカチュウたちは、我々『ポケモン保護団体』が引き受けることになった！安心して、家に帰ってくれ給え！

青髪の彼がロボットの操縦席内部にあるマイクから、スピーカーを通して一般市民に大してアピールをする。実際危害を与えず、トリモチで収獲しているのだ。この行動は危害を与えないものとして、十分に信頼を勝ち得たのである。

「しかし、うちのボスも妙な事するわよねえ。特殊な電界作って、ピカチュウたちを出させて」

「二応こいつらは、絶滅危惧種だしな。ポケモン保護団体というポケモンだいすきクラブをもじった仮想組織を繰り出してまで、ボスはこのピカチュウをどうしたいんだろう」

な」

「そこはあたしらの領分じゃないってわけだけど、気になるわね」

彼らが談笑していると、ロボットに大量の雷撃を加えられた。

しかしこのロボットは絶縁体でありながら、受けた雷撃と内部にいるピカチュウから放たれる雷撃を使って攻撃をすることができると。だから、簡単な雷撃は無意味なのだ。

「ちよ、収納しているピカチュウのほぼ二倍の電力じゃないの!」

「ピカチュウか、それともボスのライチュウか?」

「結局どれでもいいってわけね!」

「そーそー、結局強かったらどんなやつでも褒めて貰えるしな!」

彼らは雷撃によって視認できなかつたが、それを地面に流して雷撃を無効化し視界を確保する。

眼前には電気タイプ専用感知レーダーが警告を発するほど、驚異的な存在であるピカチュウを発見した。そのピカチュウはレア度4、上条当麻の相棒だ。

「ピガチュウウウ」

「おーおー、怒ってらっしゃる」

「でも意味ないのよねー! 『秘密兵器』どうぞ!」

「この『メカニヤースー世』にかかれば、どんな敵でもイチコロってなわけよ!

発射、『電磁砲』！」

雷撃の塊が、ピカチュウに向かっていった。しかし、ピカチュウはその雷撃を、わざと食らって自分のものにした。そしてピカチュウは、それを使って地面から超振動砂鉄ブレードを取り出す。

「無駄無駄無駄あ！そんなんじや、この『メカニヤースー世』なんて、倒せないわよ！」

「そうだそうだ！電界をつかった、超ウルトラハイパー強力なバリア——」
唐突に鈍い音がした。

「「へ？」」

『メカニヤースー世』に、レッドアラートが鳴り響く。

「え、えーと、これって……」

「まさかまさかの……」

「やな予感しかないってわけ——」

『メカニヤースー世』は大爆発を起こして、三人を天空にロケットを打ち出すが如き勢いで吹き飛ばした。それと同時に上条のピカチュウは磁場により、ほかのピカチュウを助け自身の磁界と電界の支配下に置き、異常な電界と爆発の余波等から守ることができた。

「一体何なのよ、あのピカチュウ！」

「えーと、レア度4じゃねえか！」

「つまりボスに献上すれば！」

「「幹部就任、支部長就任いい感じー!!!」」

ヒューン、キラーン☆と彼方へ、飛ばされていった。

地上は、戦闘を終えたピカチュウと自分の電界を作り出し意識を元に戻せたライチュウにより制圧され、平穏を取り戻しつつあった。

だがそれは彼女たちがいる町だけの安寧である。ほかの都市では、らいげきによるショートや停電で経済的打撃を受け、壊滅状態に追い込まれていた。そんな中でも地下の彼らは、自身を顧みず前のみを見て走っている。

世界の光となって、先を走る。彼らは窮地に立たされていることを、全く知らない。それはライチュウが怒り狂う直前まで見ていた、例の光景が全てを物語っていた。

——「我々は、G-Monsters計画を再開する」——

世界はまた、動き始めた。

8：常盤學区——回動

常盤學区がピカチュウの攻撃によって混乱する中、その影響を受ける人は常盤の住人だけじゃない。例えば、公共交通機関とか、お客様第一主義を掲げている団体ほど動きに制限がかかりやすい。

その為常盤の森のふもとの街が襲撃されただけで、運航が中止になってしまう場合なんて簡単に訪れてしまうのだ。

「あーもー！なんでこんな時に事件が起こるのかなー！」

「仕方ねえーさ。このまま待機するのも面倒だ。俺たちでばばつと調査して、解決してやるおーぜー！」

「いやいやいや、そういうのはよくないかな！ここで待ってた方が、安全だと思う……かな？」

「やつぱ、疑問形じゃねえーか！大丈夫だ！俺様についてこい！」

チャーター便がピカチュウ襲撃によって止まってしまった。この便だけでなく、ほかの場所も大概止まってしまっている。

そんな中上山と新城は、今回の異常事態で搭乗口にて足止めを食らっていた。おかげ

で解決まで待機を、外国組を引率する先生に命ぜられてしまった。そのためなかなか動けない……なんてことは、毛頭存在しない。

もともと授業では『情けは人の為ならず』ということで、相互協力・救助を積極的に言う事を教えている。だから二人の考えが合致した後、先生に事件解決の補助をするというとにこやかな顔で見送られた。一応ポケモン図鑑やポケナビ・ポケギア等が携帯の役割を担っているのです、行先GPSや電話を確認と共に言う事ができる。

「さて。今回のピカチュウなんですけど、なんで暴走したんだろうね？」

「ピカチュウは電気タイプだからなあー。電気系の見えないもので制御されているとか」

「ということは、電波とかかな？」

「それはありそうだぜえーい」

新城はポケギアを使って、ラジオのチューナーをいじっていく。そこから、謎の電波っぽいのを探す。もしこれで分からなかったら、別の方法を取らないといけない。

「電気タイプのそばでやらないと、効果がわからないんじゃないかな？」

「それもそうだなあー。よし、その案乗った！」

二人は人のごみをよけて行って、電気タイプが集まる場所に立ち寄る。

その間にも新城はチューナーをいじっていた。

「ここ、デンリユウとかいるけど、ピチューとかいないかな？」

「いないようだなあー」

二人してポケモンと子連れの家族が休憩所として活用している子供広場に立ち寄る。意外に電気タイプは一匹しかいなかった。ほかのタイプはまんべんなくいるのだ。

そんなに電力費用がかさんでいないのか。なんとも裕福な事である。

とにかくここにいる人たちは、外の喧騒を完全な他人ごととして無視しており我関せずと今の状況を楽しんでいる。

子供たちのキャッキヤと遊ぶ最中飛んできたプラスチックボールが、新城にあたる。

——ピッ——ガガガガッ——ブオオオオオン——

当たった時偶然にも指を離れた新城。突然の雑音に「ん？」と彼が頭をかしげているとき、子供と一緒に遊んでいたデンリユウが上山に近づいて頭を下げた。このデンリユウは、この遊び場唯一の電気タイプである。

上山はそんな律儀で丁寧なデンリユウを見て、「いいのいいの」と笑顔で許した。そもそも怒っていない。デンリユウはほつとしたようで、子供たちのところに戻ろうと踵を

返した。

——キイイイイ——キユアアアアア——

突然の音質変化。これに新城が、頭をひねっているといつの間にか、上山のすぐ隣にデンリユウがいて電気をまといだした。

「え？」

「まずっ——！」

「ツリユウウウウウウウウ!!!」

黄色い閃光と爆発音。

それはただの閃光ではない。高威力の『かみなり』だ。

その『かみなり』は、先ほど上山達がいたブロックソファに着弾していた。爆発後。そこには無残にはじけ飛んだソファと融解した地面が、赤く焼けすさまじい熱量を放ちすさまじい光景を周囲にみせつけた。

「デンリユウ！戻れっ！」

「……」

豹変したデンリユウは持ち主に呼ばれ、その者の方へ振り向く。

周囲がパニックになり、混乱している中持ち主は果敢にも立ち向かう。

「リュウウウウツ!!」

「ヒイツ!?!」

怒り狂うデンリュウは『ほうでん』を放ち、周囲を無差別に攻撃する。これにより、空港内は完全なパニックに陥った。

阿鼻叫喚と化した中、新城は上山をかばって地面に伏せていた。

「うぐう……痛あ……っ! 新城!」

新城は上山に体をゆすぶられることで、意識を回復し上山の無事を目に焼き付け安心する。

だが周囲の混乱を背景に見て、微睡から一気に覚醒、起床する。

「上山、無事か!?!」

「私はいいから!新城こそ、大丈夫かな?!」

「俺様は頑丈だから、だいじょおーぶだ!それより、何がどうなって……うぐっ……」
「ああつ、いわんこつちやない」

新城は上山をかばったとき、デンリュウの雷を掠りであつてもぶつけたようで被害を受けた腕を抑える。上山は彼を支えるが、その場にはいつあの赤目のデンリュウに攻撃されるかわかったもんじやない。

「上山つ、あいつを止めるぞ……っ」

「駄目だよ！逃げないと「逃げるな！それでも、ポケモントレーナーか！俺様はいく！」な、なんで行けるの!?!おかしいでしょ!?!」

「だったら上山だけでも逃げとけ。俺様がしりぬぐいをするー」

二人が問答をしている間に、対ポケモン特殊警察部隊が出動。旧ポケモン、ガーディをポケモンボールから出して、デンリユウを制圧しようと必死になる。

しかしデンリユウのおかしなくらいに強い雷撃により、ガーディや警察部隊を殲滅・鎮圧していく。また『ほうでん』により、割れたガラスや落ちる照明により、未曾有の大惨事が繰り広げられる。

「こうなったのは、俺様が『正解』を当てたからだ。だから、上山は逃げとけ」

「……なんで、こんなことでまじになつてるのかな。おかしいよ。何で逃げないのかな？かな？」

「何でって……」

上山の追及に苦しみなながらも新城は不敵に笑う。

「『正解』を見つけたら、この『問題』を『解答』しにいったほうがかつこいいからだろうが!!」

新城は上山を置いて、暴れるデンリユウのところへ行く。彼は右腕にある宝石「ボー

ル」をいじって、自身が出そうと思っているポケモンを選択する。例のラジオ電波を流しながら、周囲を殲滅し終え新城を威嚇するデンリユウに至近距離まで近づく。

「真白学区「マサラタウン」の新城鉄也だ！かかってこいやあーデンリユウーウー！」

電流を十分に溜めた電龍は、憤怒を隠し切れぬほど燃え上がる赤眼で新城を睨め付けた。

9：常盤學区——脈動

にらみ合う新城とデンリユウ。

戦闘は刹那だ。

十全にチャージし充電し終えたデンリユウは、新城に『チャージビーム』を放つ。ポケモンバトルではない。そのためトレーナーを消しに来るデンリユウ。

さすがにわかっていたとはいえ、行動が遅くなってしまう新城。

あともう少しで当たる。

そんな時、新城は足をすくわれ尻もちをつくことになった。これにより最大チャージの光線にあたることなくなくなった。

「どわっ!?! 上山!?!」

「旅は道連れ世は情け、かな? 手伝うよ!」

そういつて二人は宝石「ボール」から、小さなポケモンを出す。

「来い! 旧ポケモン、デイグダ!」

「出てきて! 旧ポケモン、サイホーン!」

宝石「ボール」から、赤い光線が出てくる。その光線が地面につくのと同時に、ポケモンの形を作る。そして光をまとうポケモンは、徐々に光を消していき本体を出現させる。

「デイグ！」

「ホーン！」

「リュアアアアウー！」

二匹のポケモンを前に、旧ポケモンデンリユウは威嚇する。サイホーンのみ一瞬だけびくつとする。デイグダは全く動じない。

「デウアア!!」

デンリユウは、『ほうでん』を繰り出した。サイホーンのひらいしんで、無効化される。「リュウツ!?!」

「流石サイホーン！電気タイプは完封だなあーあ！」

「いいから攻めてほしいかな？かな？」

「つしやあ！いったるぜ！デイグダ、穴を掘れ！かく乱するんだ！」

「デイグ！」

デイグダは地面に潜って、デンリユウの集中力を無駄に使わせ精神力を切らせようとする。

結果動きが鈍くなって、雷や放電を繰り返して暴れまくる。

だが全てサイホーンの避雷針によって、完封される。

「今だ、デイグダー！」

「デイグー！」

デイグダはデンリュウの真下から、突きあげるように攻撃を加える。

デンリュウはそのまま盛り上がる地面にしがみついてしまい、攻撃をまともに受け空中に身を放り投げてしまう。この好機を逃すほど、トレーナーである上山は逃さなかった。

すぐにサイホーンに、『いわおとし』を指示。

「ホオオオオン!!」

足元にある瓦礫を巧みに打ち上げる。それらは上手くデンリュウに直撃し、爆発を巻き起こす。

爆煙に巻かれ尾を引く塊が、地面に落ちてくる。真下にはデイグダがいる。デイグダはすぐに退避しようと行動する。

しかし煙の中から見える光が、デイグダを襲う。

床を木つ端みじんに破壊し、陥没どころか下の階にまで達してしまう。

「デイグダ！」

「新城、ここはサイホーンに任せて！」

「何を——」

新城の反応等お構いなしに、上山はサイホーンに指示する。

「サイホーン、『マグニチュード』！」

「ホオオオオン!!」

前足を地面にたたきつける。

想定威力、マグニチュード7!!

これにより搭乗口がある二階の床が、サイホーンを中心に直径500Mほど崩れ落ちてしまう。すでに飛行場館内は、警察により退避が完了しているので人的被害がなかったが、新城達全員が一階の受付「フロント」に墜落する。

「デイグ!?」

「リュウツ!!」

デイグダが驚く中、赤眼を紅蓮の炎のように燃やすデンリュウが『ほうでん』を放ち、落下してきた瓦礫全てを圧倒的電力量から発生する熱量で溶解させた。さすがにこれは予想外な展開なので、新城は痛む腕と足を引きずって上山を担いで分厚い鉄筋の後ろ

に隠れる。

「リュウ……リュウ……」

そして恐ろしいほどの雷撃を発生させたデンリュウは、息切れも同然で体を上下に揺さぶっていた。そんな集中力も体力も、すべてがずさんなデンリュウにデイグダが泥かけをしたため、戦闘不能に陥る。

さすがに命中率が最低になり、6回も浴びせられれば倒れるだろう。もちろんデンリュウも、怒る気力すらなく気絶するようにぶっ倒れた。

溶解し冷え固まった鉄筋や瓦礫の影から、新城と上山が頭を出して周辺を確認。何もドツキリがないことを、再確認できたので表に出てくる。

「えーと……逃げるかぁー」

「その意見に、賛成かな？」

二人はこの惨劇の責任を取りたくないの、デンリュウを置いたまま逃げようとしたらサイホーンが何か吠えている。

「どうしたのかな、サイホーン」

「ホンッ、ホンッ、サイッホーン！」

角を見せつけてくる。するとなにやらストリーマーのようなものが出てきて……。

「やっべー！」

「きゃっ!?!」

新城は上山を担いだままざっと引き下がる。痛みから顔がゆがむが、それすらも無視して回避した。直後、ある方向から雷撃が落ちてきた。

「新城、ちよつと放して!」

「お、おう」

解放された上山が、ポケナビを起動しマップを確認。そこから雷撃が来た方角と電波塔、ラジオ塔の位置を確認する。何かを思い至ったのか、上山はサイホーンを戻して走り出す。

「上山っ!どこへいくんだっ!」

「犯人がわかったかも!」

「ちよ。待て!俺様も行くぞおー!」

「だったら、電波塔のところに行ってくれない?」

「は?」

新城はデイグダを戻しながら、自分の手足に上山と一緒にテーピングを行って補強をする。

これで痛みがきても、患部の炎症が増すだけで被害の拡大が行われなくなるはずだ。新城は上山に飛行場を抜け出している道すがら、その推理つばいのを聞く。どう考えても判断材料が少ないように思えるが……。

「今回の事件だけど、ピカチュウが暴走したのは常盤の森で三番目に標高が低い山にある電波塔のせいよ」

「は？」

「さつき私達は子供たちの憩いの場にいたけど、偶然にもチューナーセットを成功していたよね。それでデンリュウが暴走。でも、その混乱の時、最も近くにいたのはデンリュウじゃなかった。

新城の近くに、私の近くにもほかのタイプのポケモンもいた。正直、ありえないかな。だって、そのラジオ……すっごくうるさいし、もしそれで暴走とか色々状況があるけど、出来過ぎてるよ」

「やつぱりかぁー。戦闘中ずっと結構な音量でながしてたからなぁー。ということ、この発生源である電波塔とラジオ塔の占拠だな！ だがあの雷撃がよくわからんぞ！」

「でしようね！ でも、ポケギアと私が以前ここに来たおかげで、答えはわかったかな

「！」

「それは?!」

「あの雷撃は、地下からのもの! 避雷針は直線的に受けるから、圧倒的な上昇ベクトルを持つ雷撃が、避雷針によって拾われて吸収したんだと思う。だってあの放電とかも、放たれる瞬間からじゃなくて放たれた少しあとから、避雷針効果が出始めたんだよ!」

「ちよつと待て、『圧倒的な上昇ベクトル』? 何を言つてんだ!？」

「あのね、あの先には常盤學区一の自然公園があるんだよ! そして唯一の地下からの穴で、あの威力の雷撃が出てこれるのは、『地下鉄の通気口』かな!!」

マンホールは電気を通してても、雷撃による進行で押し上げられることはない。押し上げられたとしても、それは着地した瞬間の爆発くらいだ。

地下以外の考え方をしてみよう。空中。まず晴れで、飛行機が飛んでおり待機状態または、他の空港へ進路変更中。いろんな意味で上空からの雷撃は危ないし、目視されている。

他からの雷撃は? まずそんなものを放つと、町中が停電するか回路が焼き切れる。また戦闘はポケモンセンター周辺でないと、治安維持の名目から『路上決闘』『公共の場での私的戦闘』は違反とされているので、まずありえない。

そして最大の理由は。街中でピカチュウたちが暴れているのにその電気が、避雷針に

よって呼び集められていない事。

これらを考慮すれば、地下くらいしかありえない。

このように結論を言っていると、電波塔とラジオ塔へ向かう最後の分岐点にくる。

「壊すだけでいいから、絶対に死なないように」

「わかってるさ。 上山も気を付けろよおーお?」

「また、生きてたら会えるかな?」

「おう、俺様と逢える事を楽しみにしとけよ?」

「うん、楽しみかな? かな?」

二人は手を振って、お互いの攻略先へ向かう。もちろん通信媒体はもっているのだから、この後の合流も容易だ。

そして上山は『常盤學区中央放送局』に、新城はピカチュウを蹴散らしながら『第三電波塔』に来る。さあ、大詰めだ。

10：常盤學区

とある地下。地上から吹きこむ風が気持ちいいここは、埃っぽさと共に悪だくみにおいがプンプンする。

「あらあ、かわいいネズミちゃんたちね。おとなしくしときなさい？さもないと、ちよつと痛くするかもね？」

「ピカ？ピカピカチュウ！へああ？邪魔すんじゃないわよ」

「ライライチュウ！へこんな時に敵とは、全く面倒ですね！／＼Enter」

上条のピカチュウと森のピカチュウの長であるライチュウ二匹が、ロケット団と対峙している。

ロケット団は旧ポケモンであるコラッタやニドラン♀を繰り出しており、通すより足止めする気満々だ。

「全く可愛くないわねえ。ボスのために捕獲しなきゃいけないけど、これは倒した方が効率はよさそうね」

「ピカピカ、チュウピッカ！へやれるもんなら、やってみなさいよ」

ピカチュウは指を立てて、『Come On』のしぐさをする。このしぐさにライチュウはぎよっとする。

「ふん！強がつていられるのも、今のうちよ！コラツタ『電光石火』、ニドラン『すなかけ』！」

さて……。何故上条のピカチュウとライチュウが、地下にいるのか。

それは少々時間が遡ることになる。

森の中で上条達のために仁王立ちしたピカチュウは、ライチュウを強力な電撃と磁場で制圧した。その直後山を登ってきた方向にある出立地の街で、彼女以上の雷撃が目視できるレベルで暴れまわっていた。

それを目撃したピカチュウは、森のピカチュウがさらに狂暴になっているだろうと思つて長らしいライチュウをつれて下山した。

下山してポケモンセンター付近になると、強力な雷撃を放っている正体である『メカニヤースー1世』を発見。これを撃破し、中身のロケット団をふっとばした。

解放された森のピカチュウとライチュウは、雷撃の使い過ぎで衰弱していたので近所のポケモンセンターに一般人達と協力して運び込む。

ピカチュウはともかくライチュウは軽症で、包帯とけがの手当てでなんとか済んだ。この時ピカチュウはライチュウと話し合つて、諸悪の根源がどこにあるか聞いた。

「地下にありますか、戻る気ですか？ / Escape」

「当たり前でしょ！ トウマは今も困つてるはずよ。相棒である私が行かないといけないの！」

「へそうですか、わかりました。ならば私もとことん付き合つてやりましょう / Insert」

「へよつしや、きまりね！——とここで、場所は？」

包帯や湿布を体中につけているライチュウは、ばんそうこう等を肌につけているピカチュウと共に巨大な『常盤第一中央公園』に來た。

コンクリートジャングルの中にある、清涼感溢れる森だ。

「へここです / Enter」

「へこれ？これが何なのよ」

「地下鉄の空気入れ替えと気圧調整の通気口です。 / Enter」

鉄格子から覗く暗黒の地下への穴。上に立ったピカチュウとライチュウは、スカートがめくれる中二人が手を組み合わせて巨大な電子回路を作り上げる。

これにより巨大な磁界と電界が発生する。

「私が拾ったゲームコインに通電し、磁力で素粒子まで加速させ一気に放ちます／Sh
ift」

「へこれって確か、『電磁砲』っていうものだったわよね？」

「へはい。ですが、純粋なポケモンの技ではないってのもんですので、『レールガン』が正しいと思われます／Scroll Lock」

「へじゃあ、合体技つてことではいってみますか！」

「へはい！一氣にぶちかまします！／Delete」

「へ『超・電磁砲』『レールガン』!!」

二人が両手で作り上げた電磁界に浮くコインは、作られるレールにより一気に加速し足元にある通気口の合金鉄格子を溶かし、一気にそのまま貫通する。威力は十分なように、格子の融解・地上部分で磁気嵐発生、地下深くで発射数秒後爆発音が発生。

「へやっちゃいましたね／Break」

「へでもしやーないわよ。それにあたしたちの脳波や電界を操作する不快な電波が、異常に強くなったわ。いきましょ」

「へもちろん！／Insert」

そして二人が地下に降りて意気揚々と進もうとしたとき、ロケット団が出現したので

ある。

コラツタはでんこうせっかで、ニドランはすなかけを行うとしている。遠近の攻防は、今のところ問題ではないが、ピカチュウたちの方に問題がある。

「へあなたは下がってて。体力が落ちてんだから、元気な私がやるわ」

「へ……わかつた／Enter」

コラツタがピカチュウに接触する瞬間、気合の声を発して周囲に『ほうでん』する。

これによりロケット団一味全て撃破。ライチュウはこの雷撃で回復したが、ピカチュウは少々消耗してしまった。

「へほかにやり方があったのでは？／Alternate」

「へあ……」

ライチュウは真上を指す。

電界のおかげで微粒子が発光しているため、トンネル内部がある程度確認できる。そんななか、ライチュウの指の先、真上にある通気口を見る。その通気口は真つ白なコンクリートが、真つ黒なすすだらけの煙突になってしまっていた。

「へもし子供が居たら、非常にやばかったですね／Back Space」

「へさ、さあ行こう！」

ごまかしたな、という意味でジト目をピカチュウに向けるライチュウ。

そんなことは気にせず、電波が強く発せられている方向へとかく前進した。

迷路のような地下鉄網であっても、マスコットでありドブネズミでもあるライチュウにとつて庭である。進行途中でこの場所の壁に、いかにも怪しい場所がありピカチュウを案内する。入口は『R』と書かれており、ご丁寧にも認証ID読み取り機があった。

こんな精密機械は、ピカチュウのような粗暴さではなく慣れたライチュウの緻密さ正確さで、安全に壊すことができた。

おかげで変な通報もなく、進むことができる。

そんな進む過程で、ライチュウは口元まで我慢していた言葉をピカチュウになげかける。

「へピカチュウ／Home」

「へ何？」

「へ『G—Monsters計画』って知ってますか？／Enter」

「へは？」

振り返りつつも、決して歩みは止めなかった。